

第6学年1組 道徳学習指導案

- 1 主題名 責任を果たす喜び 高学年4－（1）役割・責任
資料名「班長になってよかったな」 出典 光文書院

2 主題設定の理由

- 本主題は、集団と個のかかわりの基本を述べたものであり、身近な集団の中で自分の役割と責任を主体的に果たす児童を育てようとする内容項目である。ここでいう役割・責任とは、集団の中で自分が担っている役割を果たすことを指している。子どもが集団の中でたくさんの人と関わり合う中で役割を果たしていこうとすることは、難しさや大変さという心情を伴うものである。しかし、その中には、役割を果たした喜びや楽しさ、自分の自信となって返ってくるものもある。そのため、一人一人が役割を果たすことによって、自己が向上すると共に、集団全体が向上するというところに気づくことができるよう指導していくことが重要である。6年生のこの時期の子どもたちは、自分たちの生活が多くの人にお世話になっていることを自覚できるようになりつつある。しかし、その一方で、自分自身が属している集団に対して、積極的に貢献しなければならないと考える児童は多くはいない。そこで、本主題では、集団の中での役割を果たすときの心について考えていくことを中心に指導していく。本資料は、6年生になってしゅしゅ登校班の班長になったぼくが主人公である。ぼくは、だんだん言うことを聞かなくなる下級生に困り、班長の大変さを痛感する。しだいにやる気を失ったぼくは、班長としての仕事がいい加減になってしまう。そのような頃、ぼくは風邪を引いて学校を休んでしまう。ぼくは、登校班のことが気になりながら、一方では、自分がいなくても同じだという気持ちももっていた。しかし、二日後、風邪が治って登校したとき、みんなに嬉しそうに迎えられ、ぼくは自分が役に立っていることに気づき、自信がわいてきて、班長になってよかったなと思う話である。本資料は、道徳的場面が明確で、場面ごとに、自分の道徳的見方・考え方・感じ方に気づかせやすい。また、友達との交流を通して、友達の道徳的見方・考え方・感じ方にふれ、役割を果たしていくときの難しさや大切さ、楽しさや喜びを感じさせる上で効果的であると考えられる。
- 本学級の子どもたちは、一年生のときから少人数の学級集団や大家族の中で生活を送っていることから、自分の仕事をきちんとしなければならないという意識をもつことができている。そのため、4月は進級当初であるにも関わらず、各委員会のメンバーを決める際、学校のリーダーとして仕事をしていくためによりよいグルーピングができるよう話し合いを重ねて役割分担をしてきた。また、委員会活動以外にも、クラブ活動、学校行事などで、学校のリーダーとして積極的に参加していかなければならないことが多くあり、そのような場面においても、様々な役割分担をし、円滑に進むようそれぞれ責任を果たしてきた。このような経験から、子どもたちは、役割を果たすことの難しさや大変さを感じることができている。その中で役割を果たすことによって、難しさや大変さを感じる中にも、楽しさや喜びもあり、自分の役割を自覚して責任を果たさなければならないという意欲が徐々に高まってきている。その一方で、頼まれたことや、言われたことをすることで精一杯の子どももいる。
- そこで、資料の主人公ぼくの気持ちを共感的に捉えさせることを通して、役割を果たすときの難しさや大切さ、楽しさや喜びに気づかせたい。
- 本主題の指導にあたっては、主人公ぼくの気持ちや行動を通して、集団を維持し、向上させるために、自分の役割を果たすことの大切さを再認識し、役割を果たす難しさの中にも、楽しさや喜びもあるということを感じることにによって、主体的に役割を果たしていこうとする意欲をもつ子どもを育てていきたい。
- そのために、まず、導入で、歓迎集会や歓迎遠足で一年生のお世話をしているときの自分の思いを想起する。やりがいがある、一年生のためにがんばろうという子ども、

大変だった、くたびれた、もう二度としたくないという子どもがいると考える。最上級生としてしなければならない役割だが様々な思いがあるということに気づかせた上でめあてを把握させ、価値への方向付けを行う。

展開前段では、はじめに、資料「班長になってよかったな」を、共感的にとらえさせるために、主人公であるぼくの気持ちになって範読を聞かせる。次に、「五年生まで自分も班長の言うことを聞かなかった」「今でも好き勝手にやれる立場の方が楽だ」と考え、しゅしゅ班長になったというぼくの状況を板書でおさえた上で、みんなが注意を聞いてくれないときのぼくの気持ちについて話し合わせる。ぼくの気持ちを考えやすいように、挿絵を提示し、吹き出しで考えさせる。場面絵と吹き出しからぼくの気持ちを考えることによって、ぼくの「嫌だな、だからなりたくなかったんだ」という嫌だという気持ち、「困ったな、どうしたらいいんだろう」という困惑する気持ち、「ぼくの言い方が悪かったのかな」という反省する気持ちに迫りやすくさせる。それから、風邪をひいて学校を休んだときのぼくの気持ちを話し合わせる。ここでは、まず、道徳ノートの吹き出しにぼくの気持ちを書かせる。書くことによって、学校を休んで役割が果たせない自分の状況に対して、どんな気持ちをもっているのか自分考えを明確にさせる。次に、自分や友達の考えを明確にさせるために、書いた吹き出しに近い気持ちの所を表す道徳ノートにシールを貼り、黒板にも白のネームプレートを置かせる。ネームプレートを元に、考えが同質の友達や異質の友達とで交流をさせる。同質や異質の考えを聞くことによって、様々な考え方があるということ意識させる。その際、子どもがどのような気持ちをもっているか把握するため、机間指導で見取りを取る。それから、全体で交流を行う。ここでの話し合いでは、主に、ぼくの「いなくてもどうせ同じだ」という投げやりな気持ち、「登校班大丈夫かな」という心配する気持ち、「いいかげんにしていたけど、治ったらまたがんばろう」という前向きな気持ちが出されると考える。これらの気持ちが本時でねらっている役割・責任の価値に繋がる考えであるため、子どもたちが明確に考えを深められるよう意図的指名をすることによって交流に深みが出るよう工夫した上で、類型化して板書する。最後に、自分が役に立っているということに気付いたときのぼく気持ちを話し合わせ、「ぼくも役に立っていたんだな」「認めてもらえて嬉しいな」「自信がわいてきたぞ」「班長になってよかったな」と、主体的に自分の役割を果たしていこうとすると、自分自身に喜びや成長をもたらし、自信となって返ってくるという心を膨らますことができるように方向づける。その後、ぼくの気持ちが先ほどのネームプレートのときとどのように変化したか捉えさせるために、シールと黄色のネームプレートを貼らせる。

展開後段では、自分の役割を果たせたことにはどんなことがあるか、自分の生活を振り返らせる。振り返りが難しい子どもには、事前に生活の中で親切にしたりされたりしているメモをしておき、机間指導で個別に声をかけていく。このことによって役割を果たす楽しさや喜びを意識させる。

終末では、今後の実践意欲を高めるために、日常生活における子どもたちの役割を果たしている姿について、他の先生からはなしてもらったことをビデオにまとめ、視聴させる。

3 ねらい

- 集団を維持し、向上させるために、自分の役割を果たすことの大切さを再認識し、役割を果たす難しさの中にも、楽しさや喜びもあるということを感じることによって、主体的に役割を果たしていこうとする意欲を高める。

4 本時 平成19年6月

5 準備

- 子ども：資料、道徳ノート、ネームプレート（白と黄色）
- 教師：場面絵、短冊、ビデオ

